

すみれ 令和8年9月度特別作品

聖湖

すみれ

父は小学校の教諭だった。山縣郡内を転々とした。私たち七八姉妹は出生地がばらばらで、私は樽床村で生まれた。今は聖湖の底となり、村は消滅した。その村を、沈む前に一度だけ訪ねたことがある。村人は現状の報告と歓迎を兼ねて父を迎えてくれた。

その夜は、立ち退きしていない家に泊まった。大人は延々と語り、酒を酌み交わしていた。子供の私は、秘密めく話に恐怖を覚え、一睡も出来なかった。

今では、年に一二度、聖湖と八幡高原を訪ね、言い知れぬ安堵感に浸る。そこは、私の第二の故郷である。高原に咲く松虫草、女郎花、吾亦紅、そして芒原が私の心の風景だ。

夏来れば八幡高原へ行くと決め

夏草に銀輪倒し村に入る

炎昼や立ち退かぬ人集まりて

秘密めく村人の声夏の夜

暑き夜のひそひそ声に怯えたる

帰り道滴る汗に皆黙し

握り飯頬張り汗と涙拭く

夏草や時に湖訪ねたし

松虫草静かな風に任せをり

天高し湖底に我の生地あり

《作品鑑賞》

暁子

故郷の門口に立てば、誰でも思いは懐かしい過去に帰っていきまふ。まして、その故郷が水底に沈み、昔を偲ぶよすがも無いとなれば、記憶の奥底に沈んだあの日々の姿や声が、鮮明に蘇がえることもあるでしょう。

夏来れば八幡高原へ行くと決め

作者の強い想いをきっぱりと詠まれました。

秘密めく村人の声夏の夜

隣の部屋からひそひそと話し声がします。子供心にも話題の深刻さが伝わり、その話し声の中に大好きな父親の声も混じっていることが、余計に作者を不安な気持ちにさせました。

松虫草静かな風に任せをり

八幡高原の風に揺れる松虫草、私もいとおしくてしばしそこから離れられませんでした。

天高し湖底に我の生地あり

深い記憶の旅が終り、現実に戻れば、高い空の下、碧々とした湖が静まり返っています。聖湖の空気を胸いっぱい吸い込めば、又明日からの力が湧いてくるのです。